Un≠i　第6回本公演

ホメをスタシす

登場人物

佐竹　兼好【さたけ　けんこう】（芸名：池端　兼【いけはし　けん】）
・・・大御所俳優で今は芸能事務所「ポッドエッヂ」の社長。通称、兼さん

佐竹　環【さたけ　たまき】
・・・兼好が溺愛している末娘。言葉少なくいつも人形を抱いている

直井　篤【なおい　あつし】
・・・ボッドエッヂを取材する取材班の一人
「コンスタントリー」の大ファン

須賀　孝文【すが　たかふみ】
・・・ポッドエッヂ所属のユニット「コンスタントリー」
寡黙で無口なキャラで売っているが本当はオネェ

赤坂　聡【あかさか　さとし】
・・・ポッドエッヂ所属のユニット「コンスタントリー」
好青年キャラで売っているが本当はヤンキー

徳島 竜一【とくしま りゅういち】
・・・兼好の付き人

終夜【しゅうや】
・・・本名は山形義雄（やまがたよしお）
ポッドエッヂ所属の元ホストタレント

山梨　美智子【やまなし　みちこ】
・・・マネージャー

神戸　沙織【かんべ　さおり】
・・・直井と丸井の上司

丸井　みのり【まるい　みのり】
・・・ボッドエッヂを取材する取材班の一人

■第一幕

過去。兼好と向き合う環
環は自分を抱きしめるように座りこみ
兼好は困ったようにそれを見つめている
二人を囲む須賀、沙織、直井

環　「お父さん」
兼好　「違う」
環　「お父さん…」
兼好　「違う」
環　「・・・」
兼好　「違うんだ…」
環　「違う…」
兼好　「いや…」
環　「・・・」

兼好、おもむろに人形を差し出す

環　「え？」
兼好　「やるよ」
環　「でも…」
兼好　「やる」

環、受け取る

環　「ありがとう」
兼好　「環…」

二人を囲む三人が話だす

直井　「例えば、生まれなかったとして。世の中は何か変わっていた？」

（直井の台詞中）みのりが現れる

沙織　「もしも、生きていなかったとして。歴史に変化はあった？」

（沙織の台詞中）終夜と竜一が現れる

須賀　「今、生きているとして。変えられることは、何があるか？」

（須賀の台詞中）赤坂と美智子が現れる
環が立ち上がる

兼好　　「過去に戻れるとして、何が変えられる。今、後悔しているとして、何が変わる」
環　　「今、生きていないとして。誰が私を見てくれる？」

　　立ち去ろうとする環、駆け寄る直井

直井　　「どこへ行くの」
環　　「どこにも行かないよ」
直井　　「行かないで」
環　　「どこにも行かないよ」
直井　　「どうして…」
環　　「あなたのせいだよ」

　　環、周りを見回して

環　　「あなたのせい。みんなあなたのせい。あなたと、あなたと、あなたと、あなたと、あなたのせい」

　　走り去る環

直井　　「待って！！」

　　環、一瞬振り返るが走り去る
　　暗転

■第二幕「ポッドエッチ」の前

明転

丸井みのりと直井篤は取材のために芸能事務所ポッドエッチを訪れる

丸井　　「沙織さんの昔のよしみとはいえ、うちみたいな弱小制作会社がこんなとこ取材できるなんて、あのひとどんだけ顔広いんだか」
直井　　「さすが、ハピスタの建て直しに呼ばれてきただけのことありますね！」
丸井　　「建て直しだけじゃないみたいだけどねぇ、来た理由」
直井　　「そうなんすか？」
丸井　　「うーん、みたい。私もよくしらないけど。というか、本当にこんな辺鄙な場所にあるのね、ポッドエッチ。芸能事務所なのに」
直井　　「はーーー！あのコンスタントリーの事務所にきちゃったんですね、僕…！」
丸井　　「緊張しすぎ。本当に好きだね～。コンスタントリーのなにがいいの？」
直井　　「なにが…なん…僕の語彙では…語り切れない…」
丸井　　「ああ、そう」
直井　　「でもしいていうなら、須賀さんの男らしさと赤坂さんの爽やかさのバランスでしょうか…」

丸井　　「へえ」
直井　　「興味ないなら聞かないでくださいよ」
丸井　　「興味ない訳じゃないけど、聞いた所で広げるほどではない」
直井　　「興味ないじゃないですか」
丸井　　「さ、直井くん！気合い入れていくよ！」
直井　　「ちょっ、は、はい！」

■第三幕　「ポッドエッヂ」

壁一面に兼好の写真がある「ポッドエッヂ」の一室

椅子にのけぞるように座る佐竹兼好と
兼好の肩を揉んでいる竜一、終始楽しそうに話をしている
少し離れたところで忙しそうに電話をしている
兼好のマネージャーの山梨美智子

ノックの音

竜一　　「（兼好の様子をみてから）はい！どうぞ！」

現れる丸井と直井

丸井　　「失礼します～制作会社ハピスタの丸井みのりです」
直井　　「同じく直井です！」
兼好　　「（片手を上げ）おお」
竜一　　「おはようございます！（電話をする美智子に）美智子さん！」
美智子　　「（直井と丸井に気づき、電話に）ちょっと今立て込んでるんで、こちらから折り返します！はい！はい！失礼しま～す（電話を切って）お待たせしました～お久しぶりです、みのりさん！…と（直井に）えっと…？」
直井　　「あ、今月から入社した直井です！直井篤と申します！よろしくお願いします！」
美智子　　「なるほど、みのりさんが言ってたコンスタントリーファンの新人くんか～」
丸井　　「そうそう」
直井　　「え？！丸井さん言ったんですか？！」
丸井　　「そりゃあね」
直井　　「え～職権乱用ばれるじゃないですか…」
丸井　　「使える職権は乱用したもん勝ちよ」
直井　　「ええ…」
美智子　　「あ、自己紹介しとくね。私はポッドエッヂの総合マネジメント担当の山梨美智子です。よろしくね」
直井　　「はい！丸井さんから噂はかねがね！」
美智子　　「あー。みのりちゃんからの噂ってことは、大体余計なことだ」

直井　　「いえ、そんなことは！」
美智子　　「お？動揺したね」
直井　　「えー…」
丸井　　「ちょっと美智子さん！新人くんいじめないでくださいよ！それに、沙織さんほど余計なことは言ってないはずです」
美智子　　「あはは！そうだね。沙織っていえばーー」

美智子が話を続けようとすると、兼好が咳払いをする

美智子　　「ああ、ごめんね兼さん。仕事の話ね。わかると思うけど、この人が池端兼こと佐竹兼好。うちの社長であり稼ぎ頭よ。横にいるのは付き人の竜一くん」
竜一　　「徳島竜一です！」
丸井　　「ご挨拶おくれました。ハピスタの丸井みのりです。これから約1か月、コンスタントリーの密着をさせていただきます。今回は事務所内の自由撮影の許可、ありがとうございました」
兼好　　「あー。俺は映るか？」
丸井　　「そうですね。ポッドエッヂは、社長があのイケハシケン！ということもあって、コンスタントリーの取材とは言いつつも、兼さんが出ることは暗黙の了解です」
兼好　　「そうか、そうか」
直井　　「コンスタントリーを育て、世に出したのは、あの名優、イケハシケンっていうのは、ファンだけじゃなくてみんなが知ってます！コンスタントリーファンとしては、そんな兼さんと須賀・赤坂コンビとの交流みたいはずです！」
兼好　　「（嬉しそうに）そうか、そうか」

ノックの音

竜一　　「はい！」

須賀と赤坂が現れ頭をさげる
兼好は手を上げるだけで応える

赤坂　　「お疲れ様です！」
須賀　　「っす…」
直井　　「わぁ…！コンスタントリー！ふたりとも！ほんもの…！」
美智子　　「お疲れ～。前に話した取材の担当の方よ」
丸井　　「ハピスタの丸井です」
直井　　「んっ！なっ！直井です！！」
赤坂　　「丸井さんと、直井さんですね。今日からよろしくお願いします」
丸井　　「よろしくお願いします」
直井　　「よっ！るしっ！しゃっす！」
須賀　　「…ふっ（少し笑う）」
直井　　「あの須賀さんが…笑った…」
須賀　　「いや…」
赤坂　　「須賀さんは表情が乏しいから能面なんて呼ばれてるらしいけど、案外表情豊です。なあ、須賀？」
須賀　　「いや…さあな…」
直井　　「うわぁ…本物が…目の前でしゃべってる…」

丸井　　「まずはインタビューさせてもらいたいんですが、良いですか？」
美智子　　「ええ。上の部屋、使ってください」
丸井　　「ありがとうございます！ではお願いします」
赤坂　　「はい！」
須賀　　「うっす」
丸井　　「ほら直井！いくよ！」
直井　　「あ、あ、はい！」

丸井、直井、須賀、赤坂が階段を上がっていく

兼好　　「あいつ、大丈夫か」
美智子　　「みのりさんがいれば大丈夫でしょう」
兼好　　「どうだか」
竜一　　「丸井さん、でしたっけ。前から知ってるんですか？」
美智子　　「最近ハピスタに入った、神戸沙織って子が友達なの。最近はいったって言っても、引き抜きみたいな形で、今はあの子たちの上司みたい。みのりちゃんは沙織の一番弟子って、紹介されたのよ」
竜一　　「へえ～」

バンッという扉が勢いよく開く音
手鏡を持った終夜が現れる

終夜　　「おいおいおいお～～～～い！」
美智子　　「あー、うるさいのが来た…」
終夜　　「なんで？なんであの二人ばっかりに仕事くんの？今日も俺様こんなに美しいのに？なんであいつらなの？」
美智子　　「勝手に仕事断ったり、勝手にブッキングしたり、勝手にホストクラブで働いたりするからでしょうが！仕事がゼロじゃないことを喜びなさい！」
終夜　　「はあ？あんたが俺の売り込み方まちがってんじゃねーの？マネージャーの腕がないだけじゃねーの？」
竜一　　「終夜さん、言い過ぎです！」
美智子　　「いいのよ、竜一。こいつの見た目80点、中身3点は今に始まったことじゃない」
竜一　　「ああ…あとの17点は？」
終夜　　「ねえ～シャチョ～マネージャー変えようよ～このおばさんには俺様の美しさを活かしきれないよ～」
美智子　　「はぁ？誰のおかげで今のポジションがあると思ってーー」
兼好　　「まぁまぁ。いいじゃねえか。なあ？終夜。お前は相変わらず面白い男だな」
竜一　　「17点…」
終夜　　「そーっす、そーっす。俺面白い男なんすよ～でもそんな面白い俺を上手く売り込めない駄目なマネージャーがいるんっすよ」
美智子　　「私がマネージャーじゃなかったらとっくに干されてるからね？」
竜一　　「17点…」
兼好　　「それは終夜。お前には才がありすぎて手に余る男だからじゃないか？」
終夜　　「も～シャチョーさすが～わかってる～」
美智子　　「甘やかすな！」

仲良さげな兼好と終夜

竜一　「兼さんはなんであんな『17点余り野郎』を気に入ってるんですか？」
美智子　「知らないわよ。自分が破天荒だったから、人とちがうのを面白いと思ってるんじゃないの？一応、バラエティーではキャラとして売れてるけど…元からこんなんだって気づかれたら痛いわね」
竜一　「まさに見た目80点、中身3点ですね。…あと17点は？」
終夜　「それで、それで？マネージャーさん？今日からコンスタントリーの密着ってきいたけど、それ、なんで俺様に伝わってないの？」
美智子　「伝える必要ないから」
終夜　「芸能事務所ポッドエッヂの事務所内を初公開なのに、ボッドエッヂ史上最も美しく人気あるタレント、終夜様に伝える必要がない？」
美智子　「もう、こうなるから黙ってたんだよ…兼さんでしょ？話したの」
兼好　「いいじゃねーか」
美智子　「良かったら口止めしてないから！まあ…そうね。終夜さん。事務所のなかにいたら映る可能性がゼロではないのに伝えなかったのは、私が悪かったわ」
終夜　「そうそう。最初から素直に認めればいいんだ」
美智子　「誰かがカメラの前で終夜さんのことを山形義雄なんて呼んだら大変だもんねぇ！」
終夜　「おい！本名やめろ！！」
竜一　「え、本名、山形義雄？」
終夜　「やめろ！！」
美智子　「知らなかった？こいつ、山形義雄」
終夜　「呼ぶな！それで呼ぶな！！」
兼好　「いいと思うけどなあ。山形義雄」
終夜　「おい！シャチョーでもそれは許さねえぞ！俺は終夜！終わる夜と書いて終夜！これ以外の名前は認めない！特にそんな古臭くって腐敗臭のする山形義雄なんて名前は認めない！」
竜一　「同姓同名に失礼っすね」
美智子　「ああ！さっきの電話、かけ直すの忘れてた！（走り去る）」
終夜　「（美智子に）おい！まだおわってねーぞ！」
竜一　「なるほど！17点は声の大きさか！」
終夜　「17点よりは張ってると思うな！！」
竜一　「（半笑いで）そう、すね…」
終夜　「（つられて笑いながら）そうっすねじゃ、ないんだよ」
竜一　「（半笑いで）はい」
兼好　「そういや、環はどうした」
竜一　「あ～どこ行ったんでしょうねえ～」
兼好　「さっきまでそこにいたはず…」
竜一　「そうなんですか？きづかなかったですねえ」
終夜　「いつになったら環ちゃんは心を決めてくれんのかな」
竜一　「心？決める？」
終夜　「ほらほら、シャチョーだって、俺が息子になったら嬉しいっしょ？」
竜一　「え？」
兼好　「息子か、なるほどな」
竜一　「どういうことですか？」
終夜　「だから～俺が環ちゃんと結婚するってこと～」
竜一　「うわ」

終夜　　「今本気のでたね。本気のうわがでたね」
竜一　　「いいんですか、兼さん。僕がいうのは少しはばかられますが、こんな男のところに一人娘？を嫁にいかせるくらいなら、独り身でいてもらった方が幸せだと思いますよ」
終夜　　「はばからないねぇ」
兼好　　「竜は終夜が気に食わんか」
竜一　　「はい。中身3点、声17点ですし…」
終夜　　「一番大きい点数大事にして！見た目80点！大事にして」
竜一　　「そもそも、なんで兼さんは終夜さんを気に入ってるんですか？」
兼好　　「う一ん。そうだなあ…。似ているから、だろうなぁ」
竜一　　「似ている？終夜さんが？兼さんに？微塵も感じないですけど…」
兼好　　「若いころの俺はなあ、今みたいに落ち着いてなくてな。見た目95点、中身5点の男だったな！はっはっは！」
竜一　　「さすが兼さん！余りがないんですね！」
終夜　　「俺だって余ってはいねーぞ？！」
竜一　　「でも、今の兼さんしか知らないので、中身5点はピンとこないですね」
兼好　　「その話は、また今度な。誰彼構わず昔話語るほど、老いぼれちゃいないさ」
竜一　　「さすがです、兼さん…！」

直井、丸井、須賀、赤坂の話声が聞こえだす

直井　　「いや～感動でした！お二人のお話し、熱かったっす！ファンとしても、最高の二文字っす！」
赤坂　　「そんなそんな、大袈裟な～。なあ、須賀」
須賀　　「ああ…」
丸井　　「いえ、直井くんほどじゃないけど、私も感動しましたよ。これからの密着、さらに楽しみですね」
赤坂　　「そういってもらえたら嬉しいです！なあ、須賀」
須賀　　「ああ…」
終夜　　「おやおや～コンスタントリーのお二人ではありませんか～」
赤坂　　「やあ、終夜くん」
直井　　「おお？！終夜様！！！」
終夜　　「なんだお前。よく知ってるな」
直井　　「そりゃそっすよ！元NO1ホストから今やバラエティーに引っ張りだこ！この間のドッキリのとき怒らせようとする仕掛人に真摯に向き合って怒らず諭してた姿、人間の深さを感じました！」
終夜　　「君…わかってるじゃないか！！」
直井　　「うわあ～今日はすごいな～有名人にこんなに会えるなんて」
丸井　　「ちょっと直井くん！さすがにミーハー出しすぎよ」
直井　　「ああ…すいません」
終夜　　「いいんだよ。俺様の美しさと人としての魅力の前には、誰だってミーハーになってしまうものさ…」
竜一　　「無視して大丈夫です」
丸井　　「じゃ、私たちは一度会社に戻りますね。またのちほど、上司と戻ってきます」
赤坂　　「ああ、上司というのは美智子さんのご友人の沙織さんですね！わかりました！あれ？そういえば美智子さんは？」
竜一　　「電話しにいっちゃいました」

丸井　　「そうですか…。あとでまたお会いできると思うので、いったん失礼します。よろしくお伝えください」
赤坂　　「わかりました！」
直井　　「失礼します！」
竜一　　「おつかれさまです～」

丸井、直井、頭を下げて去る
二人がいなくなった途端、赤坂と須賀の様子が変わる
美智子が戻ってくる

竜一　　「さあ、お二人とも。お疲れ様です！」
赤坂　　「あ～めんどくせえなあ」
美智子　　「こらこら！まだあの二人そこにいるから！聞こえたらどうすんの！」
須賀　　「でも～つかれちゃったわよ～」
美智子　　「須賀まで、ちょっと！」
終夜　　「いいじゃ～ん。それでコンスタントリーが終れば俺の時代がくるっしょ」
赤坂　　「ああ？このホスト崩れが。殺すぞ」
終夜　　「あ～あ～あ！恐喝だよ？訴えちゃおっかな～」
美智子　　「やめなさい！」
須賀　　「ね～美智子ねえさん。なんで密着なんかOKしちゃったの～？」
美智子　　「密着してくれるなんて、今しかないでしょ！人気ってものはいつ消えるかわからないんだから」
須賀　　「そんなこと言ってもねぇ？あたしたちのプライベートまで密着されたらボロがでるわよ？」
美智子　　「それは…出さないでもらうしか」
赤坂　　「めんどくせぇなあ」
兼好　　「弱音を吐くな！今がお前たちのピーク！今が青春のど真ん中！幸せなときじゃないか！辛抱しろ！」
須賀　　「兼さんの言っていることもわからなくはないけどね…こんなに元々の自分から離れた自分が大人数から愛されちゃうと、辛いわ」
兼好　　「俺も芸名の池端兼と佐竹兼好を使い分けられるまで、何十年も要した。表の顔を裏の顔があって当然。それはファンも知ってはいる。どんなあなたでも愛せるとファンはいうが、実際に裏の顔を見たら、みーんな離れていった」
竜一　　「兼さんの裏の顔？」
赤坂　　「ま～兼さんのいうことはわからんでもないからな。…ただ密着はありえねえだろうが。（美智子に）おい！てめぇ頭おかしいんじゃねーの？」
美智子　　「はあ？！それは……」
須賀　　「ちょーっと！やめなさいさとぴ」
赤坂　　「ああ？うるせえな。さとぴはやめろって言ってんだろが」
須賀　　「え～さとぴ～」
赤坂　　「触んな」
須賀　　「赤坂聡、赤坂聡、赤坂聡」
赤坂　　「フルネームやめろ！」
兼好　　「（急に）おお、環じゃないか！」
竜一　　「え？」

環が現れる
（竜一と美智子は環とは接触しない。認識もしない）

美智子　「まーたはじまった」
須賀　「（手をふり）たまちゃ～ん」
環　「（振り返し）たかちゃ～ん」
兼好　「環！何してたんだ一人で！心配したじゃないか。勝手に出歩いちゃだめだぞ」
環　「心配しすぎだよ」
終夜　「たまき～。今日もかわいいな？俺のものになれよ」
環　「終夜は無理」
終夜　「な～んで～」
環　「ナルシスト無理」
終夜　「本当に美しいんだから少しくらいナルシシズム強めでもいいじゃ～ん」
環　「いうほど美しくないぞ～」
須賀　「そうだぞ～」
終夜　「笑顔で急所を刺してくるよねえ～」
赤坂　「あ、あの、環さん！あの！」
環　「え、何…」
赤坂　「げ、元気ですか？」
環　「え」
赤坂　「元気ですか！」
終夜　「猪木だ」
須賀　「猪木ね」
美智子　「古っ！」
赤坂　「くそ…環さんの前だとうまくいかねえ…」
須賀　「ね～たまちゃん、僕と結婚しよー？」
環　「え～たかちゃんは友達がいい～」
竜一　「（小声）ちょっと…これ、どうにかしてくださいよ」
美智子　「（小声）無理に決まってるじゃない。無視よ、無視」
兼好　「おい竜一！俺はな、環を嫁に出すなら、お前が良いと思ってる。付き人として俺の近くにいるのはお前だからな！俺は応援するぞ？」
竜一　「いや、無理ですよ…」
美智子　「あ！（時計を見て）もうこんな時間！あんたたち仕事は？！」
終夜　「やっべ。先いきまーす。環、少しの間のお別れだよ。辛いと思うけど」
美智子　「はやくいけ！」
終夜　「駄目マネージャーがうるさいから、愛のささやきはまた今度ね！」
環　「バイバーイ」

終夜、はける

美智子　「赤坂と須賀はもうすぐ沙織たちが来るから、上で準備しといて」
須賀　「は～い。たまちゃんまたね～」
赤坂　「た、環さん、あの…」
美智子　「はやくいけ！」
環　「バイバーイ」

赤坂、須賀、はける

美智子　「何なのよもう！兼さんも！悪ノリしすぎ」
兼好　「悪ノリ？俺は常に、全て、本気だ」
竜一　「本気なんだ…」
美智子　「そっちの方がタチ悪いじゃん…」

環、また出ていこうとする

兼好　「おい環！またどこか行くのか？！」
美智子　「あー、兼さん。行かせてあげなよ」
環　「ちょっと散歩だよ～」
兼好　「そう…そうか…だがな…」

環でていく直前に立ち止まり、振り返る

環　「バイバイ（出ていく）」
兼好　「待て、環！環……」
竜一　「兼さん？」
兼好　「…うっ？！な、くっ（苦しみだす）」
美智子　「え、兼さん？兼さん？！」

兼好、倒れ、苦しみ続ける

竜一　「兼さん！兼さん？！」

美智子、携帯を取り出す

美智子　「もしもし！救急です！救急車！救急車お願いします！」
竜一　「兼さん！兼さん！！」

遠くから聞こえる救急車の音
動かなくなる兼好

竜一　「兼さん！！！」

大きくなる救急車の音
暗転

■第四幕 「ポッドエッヂ」

明転

美智子、竜一、須賀、赤坂、終夜が集まっている

赤坂　「密着取材がなしだと？」
美智子　「そう。コンスタントリーの密着番組の枠を兼さんの特集に変えてもらう」
須賀　「なるほどねぇ。ま～あたしたちとしてはストレスが減るからありがたいけど」
終夜　「でも、密着取材の予定、もう今日からだよね？」
美智子　「そう。だから今日から兼さんについての取材が始まるわ」
赤坂　「ああ？なんだそれ？どういうことだ？」
美智子　「簡単にいうと、ポッドエッヂの内部初公開の取材は予定通り今日から始まる。ただ取材の内容はコンスタントリーの密着じゃなくて、ポッドエッヂ所属全員から兼さんについての取材になる」
終夜　「ふぅ～～～！なるほど、なるほど！コンスタントリーオンリーじゃなくなったわけね！つまり俺様の出番ってことでは～？？サンキューシャチョー」
竜一　「兼さんが倒れたっていうのに、よくそんなこと言えますね」
終夜　「うるせーな。シャチョーが倒れたらポッドエッヂを手に入れるのは俺だ」
竜一　「絶対にそんなことさせません」
終夜　「お前も聞いてんだろ？シャチョーの話。娘の環と結婚したやつがこの会社の跡取りだ」
竜一　「娘、ですか…。」
赤坂　「おい、こら。環は渡さねぇぞ」
終夜　「はあ！奥手うぶ童貞がしゃしゃんな」
赤坂　「てめぇぶっ殺すぞ！」
終夜　「やってみろコラ」
竜一　「ぼ、僕も負けません！！」
美智子　「え？」
赤坂　「あ？」
終夜　「え？」
竜一　「僕は兼さんが大好きです。僕なんかを拾ってくれた兼さんが好きです。そんな兼さんの大事な会社を、あなた方のような男には、渡したくありません。まだ兼さんは生きているから今いうのは変かもしれませんし…環さん？のことはよくわかりませんが…僕はポッドエッヂを守るためなら、あなた方と戦います」
赤坂　「おもしれぇ」
終夜　「ま、ライバルは多い方が蹴散らしがいはあるね」
竜一　「僕は、兼さんの傍にいたいので、病院にいってきます」
美智子　「うん。お願い。私もあとで行くから」
竜一　「はい。失礼します」

竜一が出て行くのとすれ違いで
丸井、赤坂、直井が現れる
焦る赤坂と須賀

沙織　「何回かノックしたんだけど…取り込み中だったかしら？」
美智子　「ああ、沙織。ごめんね。もう大丈夫」
沙織　「大変なときに悪いわね」
美智子　「いいの。むしろ兼さんの特集くんでくれて助かるわ」
沙織　「いいえ」

美智子　　「じゃあ、私は沙織と話があるから、みんなよろしくね」
赤坂　　「はい！」
須賀　　「…っす」
終夜　　「ごゆっくり～」

沙織、美智子、上に上がっていく

丸井　　「それじゃあ、兼さんについてお話し聞かせてくださいね」
終夜　　「いいけど、カメラは？」
直井　　「すいません、撮影班はあとから合流になっていて…」
丸井　　「なので、今の時間は打ち合わせですね。撮影班が到着したらすぐに撮れるように」
終夜　　「なんだ～じゃ、適当に。（赤坂に）よろしく」
赤坂　　「ああ？…あ、いや、わかったよ、終夜くん…」

終夜、去ろうとする
すると環がふらっと現れる
（丸井にだけは環が見えていない）

終夜　　「状況が変わったー！！」
環　　「あはは」
直井　　「あ、あなた…！」
丸井　　「え？…え？？」
終夜　　「ああ～会いたかったよ環」

環を引き寄せて抱きしめる終夜

赤坂　　「おいこら！終夜！！」
終夜　　「あー？赤坂くーん？（にやにやしている）」
赤坂　　「あ…」
丸井　　「え？」
直井　　「え？」
赤坂　　「あ…いや…」
直井　　「赤坂さん…？」
須賀　　「ねぇ、あんたたち、まがりなりにも報道関係者よね？」
直井　　「ええ？！」
丸井　　「あ…ええ、まあ…」
須賀　　「なら、秘密、守れるわね」
丸井　　「…守ります」
直井　　「ええ？！」
須賀　　「だってよ」
赤坂　　「おいこら！終夜てめえ殺すぞ！！」
終夜　　「ああ？んだと？！やってみろ！！！」

赤坂、終夜、揉めている

須賀　　「わかった？秘密よ？」

直井　　「え？え？ええ？」
丸井　　「あ…あはは…なるほど」
直井　　「何がなるほどなんですか？！」
丸井　　「ビジネスの顔とプライベートの顔は、誰しも違いますからね」
須賀　　「さすが。話がわかるじゃない」
直井　　「まって、まって！違いすぎ！まだ無理！まだ無理！まだ言葉失ってる最中！」
須賀　　「失ってないわよ」
環　　「ほらほら二人とも、そのくらいにしておきなよ」
赤坂　　「ああ、環。そうだな。見苦しいところをみせた」
終夜　　「悪いな。俺様としたことが…」
丸井　　「ちなみに…今は何をもめていたんですか？」
須賀　　「一人の女性をめぐる戦いよ。さっき竜一とも揉めてたの、どうせ聞こえたでしょ？」
丸井　　「ええ、まあ」
須賀　　「兼さんがね…あ、これも秘密なんだけど…自分が死んだらポッドエッチの権利を全て娘に渡すっていってるの」
丸井　　「その娘が環さん、なんですね」
須賀　　「そういうこと」
環　　「やっほー」
直井　　「で、でも、まだ兼さんは生きてますよね？」
須賀　　「そうよ。でも、倒れたってことで跡継ぎの話が現実味を帯びてきて、みんな焦ってるんじゃないかしら？あ、でも赤坂のさとぴは純粋に環さんに一目ぼれしてこの事務所はいったのよ～」
直井　　「さとぴ…」
赤坂　　「（舌打ち）ぺらぺら勝手にしゃべんじゃねぇよ」
直井　　「ああ…赤坂さんが…舌打ち…」
丸井　　「コンスタントリーのお二人の表のキャラは、設定ですか？」
須賀　　「そうそう。兼さんから、その方が絶対人気でるからって助言があったのよ。本当に売れたんだからさすがよね」
丸井　　「そうですね…」
直井　　「いやいや…まだ…むり…」
須賀　　「ごめんね～ファンの子に知らせるのはさすがに悪いことしたと思うわ。でもその職についたなら、こういうことも少なくないから、覚悟しときなさい？実際丸井ちゃんの方はなんてことなさそうね？」
丸井　　「まあ、よくある話ですね」
直井　　「あぁ…はぁ…」
丸井　　「じゃ、素のみなさんがわかったところで、私たちの仕事、させてもらっても良いですか？」
須賀　　「ええ、もちろんよ。ねえ、さとぴ？」

　　須賀、赤坂にやたらベタベタする

直井　　「やっぱちょっと待ってください！今は！今はやめてください！！」

　　テンパる直井は須賀と赤坂を離れさせようとする
　　丸井はそんな直井を止める
　　離れて笑いながら見ている環

■第五幕

心電図の音
兼好の傍にいる竜一

竜一「兼さん。僕はまだ、一人じゃ何もできませんよ」
兼好「はは。そうか」
竜一「はい。兼さんがいないと、僕はだめです」
兼好「俺は竜一を随分甘やかしちまった」みてぇだな
竜一「そうですよ。甘やかされちゃったから、僕は今、怖いです。ポッドエッヂは渡さないなんて啖呵きってきましたけど、僕にはきっと無理です。」
兼好「そんなこたぁねえよ。」
竜一「そうやって、甘やかすからですよ、兼さん」
兼好「・・・竜。お前、付き人になって何年だ？」
竜一「6年になります」
兼好「そうか。まだ6年か」
竜一「そうです」
兼好「そうか…お前、いくつになった」
竜一「もうすぐ30になります」
兼好「まだまだ若いな」
竜一「そうですか？兼さんだったらとっくに大スターの年齢ですよ」
兼好「俺はな、才能があったんだ」
竜一「そうですね。芝居も人柄も、僕はその才能に惚れました」
兼好「ほう。お前はしっかり、俺に騙されてくれたんだな」
竜一「騙される？」
兼好「残念ながら、俺の才能は芝居でも人柄でもない」
竜一「じゃあ、何ですか？」
兼好「俺がもってたのはな、自分をよく見せる才能だ」
竜一「よく見せる…？」
兼好「光にあたる部分を、より煌びやかに、より強く光らせる才能があった」
竜一「十分、すごい才能じゃないですか」
兼好「まあな！役者としてそりゃあ強く光らせたさ！」
竜一「それは知ってます」
兼好「…だがな。光ができるということは、影ができるんだ。俺は俺を輝かせるあまり、俺の後ろにいたもの全てを陰に追いやって…真っ暗な中においてきてしまった」
竜一「後ろにいたもの？」
兼好「俺を知らず知らず支えてくれたものだ。家族、友人、仲間。俺は全て、不幸にしてきた」
竜一「そんな…」
兼好「俺は自分をよく見せて輝かせることはできたが、なんつーかな、太陽にはなれなかった。真上から影を消すなんてのはできないんだ。それに気づくのに、時間がかかっちまってな」
竜一「・・・」
兼好「はっはっは！誰彼構わず昔話語るほど、老いぼれちゃいないつもりだったんだがな…」
竜一「兼さん…？」
兼好「少し疲れた。寝かせてくれ」

竜一「あ、す、すいません！また出直します」
兼好「ああ、またな」

眠る兼好
竜一が立ち去ろうとすると環が現れる

環「もし、生まれなかったとして、世の中は何か変わった？」
竜一「・・・何も」
環「今、生きているとして、何ができる？」
竜一「・・・何も」
環「許せない？」
竜一「・・・」
環「何もできないの、許せない？」
竜一「・・・」
環「助けたい？」
竜一「助けたい！」
環「何を？」
竜一「・・・」
環「自分を」
竜一「違う」
環「かわいそう！」
竜一「違う！！」
環「…違う？」
竜一「かわいそうなのは、お前だ」

環、竜一をにらみつけ、走り去る
暗転

■第六幕 「ハピスタ」

乱雑な書類や文字（視聴率とか）が並ぶ壁
（制作会社オフィスのホワイトボードのイメージ）
デスクが並び、並んで座り作業している丸井と直井
沙織が電話しながら現れる。手には分厚い封筒

沙織
「はい、はい。わかりました。ありがとうございます。また連絡ください。はい。失礼します（電話をきる）」
丸井　「おつかれさまでーす」
直井　「おつかれっす！」
沙織　「おつかれー。どうだった？初のポッドエッヂは」
丸井　「さすがに緊張しましたね～」
直井　「・・・」
沙織　「どうしたの直井くん」

直井　　「はい…いや、なんというか…」
丸井　　「直井くんにとっては大変だったんですよ、いろいろ」
沙織　　「そうだろうねぇ。ポッドエッヂは秘密が多いから」
直井　　「沙織さん…知ってたんですか？」
沙織　　「そりゃあね」
直井　　「じゃあ前もって言っといてくれたらよかったじゃないですか」
沙織　　「何事も経験。楽しいだけでやっていける仕事じゃないのはわかるでしょう？」
直井　　「はい…」
沙織　　「そうやって、秘密を知って、失望を繰り返してくしかないから、この仕事」
丸井　　「そんな言い方しなくても！」
沙織　　「…そうね」
丸井　　「なんか…今日の沙織さん、変です」
沙織　　「そう？」
直井　　「そう？」
丸井　　「はい。その資料と関係ありますか？」
沙織　　「ない」
丸井　　「というか、その資料、なんですか？」
沙織　　「それは…」

沈黙が流れる
直井だけずっと二人の顔色を窺いそわそわしている

丸井　　「…言えませんか」
沙織　　「いずれ話すわ」
丸井　　「そんなに私たち、信用できませんか？」
沙織　　「そういうわけじゃ…！」
丸井　　「この間も、取材に行くって一人でいなくなって、1か月近く連絡取れなくなって。どれだけ心配したと思ってるんですか。しかも帰ってきてから、ずっと何ごともなかったように仕事して。何の取材にいっていたのかすら教えてくれない。…本当は、どういう目的でハピスタにきたんですか？」

沙織を睨みつける丸井

直井　　「ちょ、ちょっと…丸井さん…」

電話の音が鳴り響く

沙織　　「（電話に出て）はい、神戸です。…え？！ええ、ええ。そう。まだどこにも出してないのね？わかった（電話を耳から離し）直井くん、急いで外に出てる撮影班に連絡して！」
直井　　「え？で、で、で、でも、今みんな、蛇を飲み込めるインド人の取材で…」
沙織　　「（少し笑って）蛇を飲み込めるインド人、ね。そうね。それより大事なことだから、連絡して」
直井　　「（つられて少し笑いながら）は、はい」

直井、電話をかける
（なかなか繋がらず何回も切ったりかけたりする）

沙織　　「（電話に）え？もう来てる局あんの？（舌打ち）うーん、じゃあ、すぐ行くわ！」

沙織、電話を切って携帯をいじる
メールの受信音、丸井が携帯をだす

沙織　　「みのり、今送った場所、なる早で撮影班連れてきて」
丸井　　「わかりました！」

沙織が出ていく
直井は変わらず電話と戦っている
丸井、さっと沙織の封筒を隠す

直井　　「え、今インドなんすか？！インド人？本場のカレー？！まじっすか？？え？古本…？それ神田じゃないっすか！」

環が現れる

直井　　「いやいやだから！…え？」

環と直井、目が合う
（丸井には見えていない）
しばらく見つめあう
直井、走り出す

丸井　　「直井くん？え？！直井くん？！」

丸井、追いかけようとして思いとどまる
資料を手にする
しばらく葛藤

丸井　　「いや、でも…おいていったってことは見られてもいいってことだしね…」

意を決して封筒を開け中身を見る

丸井　　「なんだ、兼さんの資料じゃん。特集用かな…。え？」

背景に文字が映し出される

背景の文字　　『池端兼（本名：佐竹兼好）は過去三回の結婚と離婚の経験がある。一回目の結婚は幼なじみとの結婚。その後ファンとの不倫から駆け落ちする形で無理やり離婚。不倫相手との間に子供が出来たものの結婚はせず、新たな女性と結婚。公表しているのはこの新たな女性との結婚のみ。その時にできた娘が「環（たまき）」。一回目の結婚で生まれている娘と二回目の結婚で生まれた息子については一切公表されていない。特に、二回目の結婚はわずか2週間ほどで

離婚しているため情報が少なく調査中。なお、不倫相手との間に生まれた娘の名前は「沙織（さおり）」』

丸井　　「沙織…沙織…？」

特集番組（第七幕）のOPのようなものが聞こえてくる
暗転

■第七幕 「兼好の特集番組」

実際の特集番組のようなもの
（背景の映像にアオリみたいなの書いてあると良い）
OPが止まる
兼好（ケン役）と丸井（ヨシミ役）と
倒れている環（スミレ役だが、環の真実の隠喩）

兼好　　「俺はよぉ、天狗になってたんだ。どんな女も俺なら結婚してもいいって言っててなぁ。金もあったからよ。だけどな、天狗に、なってたんだろうな。お前にもスミレにも、迷惑しかかけられてなかった。結婚したことすら誰にもいえねえまま、田舎に追いやって…スミレ…スミレに父親らしいこと、なにひとつできなかったな…。ヨシミ…お前にも、旦那らしいことなに一つしてねえな。ごめんな…ごめんな…」
丸井　　「…遅いよ…もう遅いよ！最後にスミレに会ったの、いつか覚えてる？9歳のときだよ。今、もうスミレ、25歳よ。しかもね、もう、25歳から年取らないんだよ…スミレはもう、戻ってこないんだよ…」
兼好　　「ごめんな…ごめんな…」

兼好、丸井、環はける

NL　　「本来はこの時間、今人気の若手俳優ユニットコンスタントリーを特集させていただく予定でしたが、今ご覧いただきました映画『男も女も人生つらいよ』で一世を風靡した池端兼さんこと本名佐竹兼好さんが緊急入院したとの情報が入り、急遽番組内容を変更してお届けさせていただきます」

インタビューを受ける美智子
美智子とは別空間で同時に赤坂と須賀
さらに別空間に終夜
（インタビュアーは声のみ、男女。
インタビュアーの１人としてそれぞれ丸井と直井がいる）
順番に照明があたるイメージ

美智子がクローズアップされる

男　　「兼さんの容態は！」

美智子　　「まだ意識は戻っていませんが、一命はとりとめています」
女　　「余命を宣告されたとの情報がありましたが」
美智子　　「えー、今現在は生きていますし、今後がどうなるかは私たちにもわかっていません」
男　　「ポッドエッヂの跡継ぎ問題によって、内部抗争が起こっているとの噂がありましたが」
美智子　　「そういった事実はありません」

　　赤坂と須賀がクローズアップされる

女　　「兼さんが倒れられたとのことですが…」
赤坂　　「はい…。兼さんは僕らにとって父親のような存在なので、心配です。でも…兼さんは強い人ですから。絶対に大丈夫です！なあ、須賀」
須賀　　「あぁ」
赤坂　　「僕たちがポッドエッヂを…兼さんの帰るべき場所を守ります！なあ、須賀！」
須賀　　「あぁ」

　　終夜がクローズアップされる

男　　「実際、事務所の中で揉めている所はあったんですか？」
終夜　　「え～？俺様がナンバー1でオンリー1なのは決まり切ってるから？別にもめる必要なくない？」
女　　「え？ということはポッドエッヂの跡取りは終夜さんなんですか？！」
終夜　　「うーん？君はどう思う？え、ちょっとちょっと！キミめちゃくちゃかわいくない？どこの局？俺、各局のかわいい子は全部把握してるはずなんだけど？」
女　　「え？！いや…最近入社して…」
終夜　　「あ、やっぱ？今夜暇？麻布にいい店があって（だんだん声が小さくなる）」

　　特集番組のエンディングっぽい音楽
　　背景に終りの文字（NHK風）
　　暗転

■第八幕

　　座り込む直井
　　ふらふらと現れる環。直井、の隣に座る

環　　「こんにちは！」
直井　　「わぁ！あ…こんにちは…」
環　　「失望した？」
直井　　「いや、あの…」
環　　「そんな自分が嫌い？」
直井　　「あ…いや…」
環　　「嫌いじゃない？」

直井　　「憧れ。光への憧れ。光を手に入れれば見えるものも輝くと思っていた。でも光の周りは、陰しかなかった。光は、幻だった。…幻だった」
環　　「期待した？」
直井　　「期待、した」
環　　「失望した」
直井　　「失望、した」
環　　「そんな自分が嫌い？」
直井　　「…嫌い」
環　　「あはは！可愛そうだね」

環、立ち上がり去ろうとする
直井、環の手をつかむ

直井　　「行かないで」
環　　「…どこにも行かないよ」

暗転

■第九幕

心電図の音
兼好が横たわっている
そばに環がいる（沙織は環に気づかない）
沙織が現れ、兼好の横に座る

沙織　　「本当に倒れたんですね、兼さん」

兼好、動かない

沙織　　「余命がわずかって本当ですか？」

兼好、答えない

沙織　　「このまま、何の答えももらえずに死なれたら、許せなくなってしまいます。私は、許したいんです。だから、真実を教えてください、兼好さん。池端兼じゃなく、佐竹兼好として」
兼好　　「…真実、か」
沙織　　「私の母親が好きになった男は、既婚者だったそうです。でもその男は、結婚していたことを隠して、母と関係を深めました。そして男は、母の妊娠を機に母と結婚してくれると、当時の奥さんと離婚しました。でも、母が私を生むころには、その男は逃げてしまったそうです」
兼好　　「…それで？」
沙織　　「母はずっと私に、父親は死んだと言っていました。でも去年、母が病気で亡くなる間際、父親は生きていると言い残していきました」
兼好　　「そうか…」

沙織　　「私は、父親を調べるために、今の仕事につきました。そして、あなたにたどり着きました」
兼好　　「なるほどな…」
沙織　　「ハピスタにきたのは、建て直しの名目で自分が取材先や内容を決める権限を得たからです。父親に近づくためです。父親を許すためです」
兼好　　「許すな」
沙織　　「え？」
兼好　　「その男を、許すな」
沙織　　「…嫌です」
兼好　　「なんでだ」
沙織　　「母が、許すと言っていたからです」
兼好　　「…そう…か」

　　環が焦るように立ち上がる
　　兼好だけがちらりと環を見て、すぐに視界を戻す

沙織　　「それに、私は決して不幸ではなかったからです」
兼好　　「・・・」
沙織　　「父親がいなくても、父親が他の女と逃げてても、私は不幸ではなかった。だから許す代わりに、その男には母を思い出してもらいたかった。死ぬ前に」
兼好　　「はは。…まだ、死なんがな」
沙織　　「そうみたいね」

　　しばしの沈黙
　　環は兼好に近づく

沙織　　「息子は？」
兼好　　「息子？」
沙織　　「私の他にも、子供がいたんでしょ？」
兼好　　「ああ…。そうかもな」
沙織　　「息子が近くにいたら、ポッドエッヂは息子のものだった？」
兼好　　「いや…素直に譲るつもりはないな」
沙織　　「…もしかして…？」
兼好　　「ははは。もしも、息子が近くにいたら。きっと、俺に似ていい男だろうな」
沙織　　「…そう。そっか…。ご協力、ありがとうございました。兼さん」
兼好　　「ああ…」
沙織　　「失礼します」

立ち去る沙織
環、沙織とは別方向に走り去る

■第十幕

走ってくる環

追いかけるようにやってくる直井

直井　　「行かないで！」
環　　「行かないよ…」
直井　　「嘘だ！！」
環　　「…行かないから」
直井　　「嘘つき！嘘つき、嘘つき、嘘つき！！」
環　　「ごめん…ごめんね…」
直井　　「いや…ごめん…。ごめんね…謝らないで…」

環、直井を抱き寄せる

環　　「じゃあ、一緒にいこう！」
直井　　「一緒に…」
環　　「それなら、嘘じゃない」
直井　　「…そうだね」
環　　「ずっと一緒だよ」

直井、うなずき環の手を取る

直井　　「例えば、生まれなかったとして、世の中は何か変わっていた？もしも、生きていなかったとして、歴史に変化はあった？今、生きているとして。変えられることは、何があるか。過去に戻れるとして、何が変えられる。何が変わる」
環　　「今、生きていないとして。…あなたは私を見てくれる？」

直井、ゆっくりうなずく
二人、並んで前をまっすぐ見つめ
同時に一歩前に踏み出す
瞬間、暗転

■第十一幕 「ポッドエッヂ」

明転
美智子が一人、忙しそうに仕事している
ノックの音

美智子　　「はーい」

現れる丸井

丸井　　「失礼します」
美智子　　「あれ、みのりちゃん。どうしたの？」
丸井　　「どうしても、お話ししたいことがあって…いいですか？」
美智子　　「ええ、もちろん」

丸井　　「えっと…どこから…と、とりあえず、これ読んでほしいです」

　　丸井、大きな封筒（沙織がもっていたもの）を差し出す

美智子　　「これは？」
丸井　　「沙織さんが個人で調べていた、兼さんの資料です」
美智子　　「兼さんの？」
丸井　　「はい。とりあえず読んでください」

　　美智子、丸井から資料を受け取り読む

美智子　　「これ…これって…」
丸井　　「はい。この沙織はおそらく、沙織さんのことだと思います」
美智子
「そう…沙織は兼さんの…」
丸井　　「美智子さんは、沙織さんといつ出会ったんですか？」
美智子　　「うーん…もう忘れちゃったな…。けど、私が兼さんのマネージャーになったくらいに知り合ったわ…。多分、私が兼さんのマネージャーになったから、近づいたのかな」
丸井　　「そうかも知れません…」

　　ばんっとドアが開く音
　　終夜、赤坂が現れる

終夜　　「聞いちゃった～」
美智子　　「めんどくさいのがきた…」
赤坂　　「兼さんは破天荒って聞いてたけど、思ったよりやることやってんな」
終夜　　「赤坂聡も少しは見習ったら？」
赤坂　　「ああ？」
終夜　　「いつまでも一人の女も口説けないようなピュアピュアでいる訳にもいかないっしょ？」

　　赤坂、終夜の胸倉をつかむ

美智子　　「赤坂！」
赤坂　　「てめぇいつもは兼さんの手前手加減してやったけどなあ、今日こそマジで許さねえぞ」
美智子　　「やめなさい！」
終夜　　「あれ～？今日報道関係者いらっしゃいますけど？」
丸井　　「いや、秘密は守りますけど…」
赤坂　　「だってよ？顔じゃなかったら何発かぶちこんでも、誰も気づかねえよなあ？」
美智子　　「赤坂！」
終夜　　「それ、俺様が世間に言いふらしたら、本当に終わりだよ？痣が証拠になっちゃうかもね」
美智子　　「終夜！」
赤坂　　「上等だコラ！」
終夜　　「ああ？！やってみろ！」

終夜を殴ろうとする赤坂
間に美智子がはいる

美智子　「やめろーー！！！」

ぴたっと動きを止める赤坂と終夜

赤坂　「おい、マネージャー…？」
終夜　「ど、どうしたよ」
美智子　「兼さん入院して、その穴埋めるのに大変な時だっていうのに、あんたたちは本当にのんきだね？！自分のことばっかりで！どれだけあたしがあんたたちのために頭下げてると思ってんの！あんたたちの秘密が、誰の努力で隠し通されてると思ってんの！」

驚き、誰も何も言えない間

丸井　「美智子さん…」
美智子　「…けっこうね、追い詰められてんのよ、この事務所」
赤坂　「そんなに、なのか…」
美智子　「コンスタントリーなんて呼び名がついて（赤坂に）あんたたちも今売れてるけど、正直ピークは過ぎて今は下ってる状態。（終夜に）あんたにいたっては、出禁になってる局もあるくらいだからさぁ。仕事の量はさらに減ってくでしょう？他にも若手が何人かいるけど…売り込みは苦戦中。そんなときに兼さん倒れてさあ…。兼さん自身も出演予定いっぱいあった分、埋め合わせられる人がこの事務所にはいなくてね。他の事務所に協力を依頼するのも、大変なのよ」
終夜　「兼さん、そんなこと一言もいわなかったじゃないか」
美智子　「いうわけないでしょう？あんたたちに心配させないようにしてたんだから」
赤坂　「だったらお前から俺たちに話せばよかっただろ」
美智子　「言ったところで、あんたたちに何ができるの？」
終夜　「それは…」
美智子　「…ごめん、責めるつもりはないの…」

赤坂、終夜、目を合わせ、すぐに外す

丸井　「なんか…忙しいときに邪魔しちゃって、すいません！」
美智子　「あーそういう意味じゃないの！あれ？そういえば須賀は？」
赤坂　「それがよ、最近、姿が見えないことが増えてんだよ」
美智子　「え？でも仕事は出てるわよね？」
赤坂　「まあ…でも、あいつ様子おかしいんだ」
美智子　「おかしい？」
終夜　「赤坂聡と意見が一致するのは癪だけど、実際、須賀の様子は変だ」
赤坂　「今も、さっきまで一緒だったはずなのに気づいたら姿が見えねえんだ」
美智子　「なんか嫌な予感しかしないわね…（時計を見て）あれ？赤坂、次の仕事15時からじゃないの？もう14時半過ぎてんだけど？！」
赤坂　「やっべ」
終夜　「ざま～」
美智子　「（赤坂がキレる前に）終夜！！！」
終夜　「こっわ」

丸井　　「私の車で良ければ、送りますよ！」
美智子　　「うわ～助かる～お願い！私、先方に電話するから」
丸井　　「はい！」

　　ばたばたと全員が移動していると
　　美智子がもっている資料が落ちる

美智子　　「あ～」
終夜　　「ちょっと、マネ～だっさ～（美智子に睨まれ）こっわ」

　　美智子に視線だけで指示され、終夜も紙を集める
　　丸井、美智子が資料を拾い集める
　　その様子を見ていた赤坂が、1枚に目を止め、拾い上げる
　　背景に文字が映し出される

背景の文字　　『池端兼（本名：佐竹兼好）について更なる調査結果を報告する。
二回目の結婚相手との間に生まれた息子の名前は「孝文（たかふみ）」。
現在は母の旧姓である「須賀（すが）」を名乗っている』

赤坂　　「須賀…孝文…？」
美智子　　「え？」
赤坂　　「おいマネージャー！兼さんの病院どこだ？！」
美智子　　「え？すぐそこの総合病院だけど…」

　　赤坂、走りだす

美智子　　「え？！赤坂？！ごめん、みのりちゃん、ちょっと待ってて！」

　　美智子、走り出す
　　（この間に、終夜もまた何か見つけ、1枚を拾い上げる）

丸井　　「は、はい！」

　　丸井がまた紙を拾い集める
　　何かを見つけた終夜、顔色が変わっていく
　　背景に文字が映し出される

背景の文字　　『―――また、兼好が公表している妻「好美（よしみ）」との間に生まれた「環（たまき）」は、（ぱっと消える）』

終夜　　「そんな…そんな…じゃあ…あれは…」

　　現れる環。終夜だけが気づく

環　　「あなたのせいだよ」
終夜　　「環…違うんだ…環…」

環　　「あなたのせい。みんなあなたのせい。みんなみんなみんなみーーんな。あなたのせい！」
終夜　　「違う…違う！！！」

電話の音が鳴り響く
終夜、はっとする
環、走り去る
電話に出る丸井

丸井　　「はい、もしもし！はい！…え…？兼さんが…？」

暗転

■第十二幕

兼好が横たわっている
傍には環がいる
竜一が現れる

竜一　　「兼さん！」
兼好　　「おお。竜。」

兼好、起き上がろうとする
竜一がそれを手伝って起こしてあげる
二人並んで座る形になる

竜一　　「元気になってよかったですね」
兼好　　「そう簡単には死なんよ」
竜一　　「さすが兼さん！」
兼好　　「ああ、そうだ。俺は池端兼だ。最後の最期まで、格好良く、潔い男だ」
竜一　　「そうですね、兼さん。僕はそんな兼さんが大好きです！」
兼好　　「はっはっは！竜は良い男だなあ」
竜一　　「兼さんにそう言ってもらえたら、嬉しいですね」
兼好　　「お前今、美智子の仕事、手伝ってんだろ？」
竜一　　「はい。少しずつ。」
兼好　　「なら…もう気づいてんだろうなぁ」
竜一　　「…まあ」
兼好　　「ポッドエッヂはなあ、とっくに限界だったんだ。それこそお前が付き人になってくれたときが、ピークだった。6年前、だったか？」
竜一　　「そうです。でも、僕、絶対ポッドエッヂを守ります、ポッドエッヂをまた盛り上げていきますから」
兼好　　「そうか、そうか。なら、そのままお前に任せちまっても良いかもな」
竜一　　「いや、でも、僕、環さんと結婚はできませんよ？」
兼好　　「そうか…なんでだ？」

竜一　　「だって、会ったこともないですし」

　　環が立ち上がり、兼好と目を合わせる

兼好　　「竜。何を言ってるんだ」
竜一　　「…え？」
兼好　　「…あ、いや…いい。いいんだ…」
竜一　　「そうですか…。じゃあ、僕、そろそろ行きますね。美智子さんの手伝いしないと」
兼好　　「ああ。またな」
竜一　　「はい！また明日」

　　竜一が立ち去る。それを追いかける環
　　兼好、環を見送っている
　　竜一と反対側から須賀が現れる
　　須賀、すたすた歩み寄り兼好に体をぶつける
　　驚く兼好、振り返る

兼好　　「お前…お前は…」
須賀　　「ねえ。どう？」
兼好　　「はは…やっぱりな。」

　　竜一が駆け込んでくる

竜一「　　須賀さん？…兼さん？…兼さん！兼さん！！！」

　　須賀を押しのけ兼好を抱える竜一

竜一　　「兼さん、まって、そんな、なんで…」
兼好　　「俺が…俺が悪かった…ごめんな…ごめんな、たか…」
須賀　　「ごめん、か」

　　力が抜け、動かなくなる兼好
　　心電図の心肺停止の音

竜一　　「兼さん！兼さん！！兼さん！！！（須賀に）お前…お前！！なんで？！なんでだよ！！！」

　　駆け込んで来る赤坂、美智子

赤坂　　「須賀！！！」
美智子　　「竜一くん？須賀？兼さん？…兼さん？！」

　　兼好に駆け寄る美智子
　　赤坂、須賀につかみかかる

赤坂　　「おい須賀！！どういうことだ？！」

須賀　　「ははは。はははははは！」
赤坂　　「須賀…？！」

　　笑う須賀
　　丸井と終夜が現れる

終夜　　「わあお。地獄絵図」
丸井　　「何、これ…」

　　須賀、赤坂をそっと突き放し
　　少し笑いながら向き直る

須賀　　「はぁーあ」
竜一　　「須賀さん、説明してください。なんで…なんで兼さんを殺したんですか？！」
赤坂　　「おい、須賀！説明しろ。どういうことだ？！」

　　現れる沙織と直井
　　少し離れたところに環がいる

沙織　　「殺した？殺したの？兼さんを？」
直井　　「ど、ど、どういうことですか？！」

　　黙ったままの須賀

赤坂　　「答えろ！！」

　　ふらふらと腰かける須賀

須賀　　「はは…。答える。答えるよ。僕はね、ただ、佐竹兼好に、僕を見て、僕を思い出して、僕のせいで苦しんで、後悔して、懺悔して…そうやって、死んでほしかったの」
竜一　　「なんで…」
須賀　　「僕の母さんはね、佐竹兼好に殺されたの」
赤坂　　「どういうことだ…」
須賀　　「母さんと兼好は、付き合ってたの。でも、兼好には奥さんも子供もいたんだって。でも、兼好はちょうど人気絶頂のときだったから、結婚してることも子供がいることも、公表してなかった。だから母さんも知らないまま、兼好と付き合ってた。そうしたら、母さんが僕を身ごもった。兼好はおろせって言ったんだって」

　　須賀のそばに寄る環
　　（須賀は気づかない）

須賀　　「兼好は、自分の人気が落ちることが怖くて、世間に嘘がばれるのが怖くて、僕のことも無かったことにしようとした。でも母さんはそれを逆手にとって、『全てばらす』と兼好を脅した。そのおかげで、兼好は離婚して、母さんと結婚した。でも、僕が生まれてすぐ、兼好は偽装した離婚届を勝手に役所にだして、他の女と逃げた」

沈黙が流れる
須賀、また笑いだす

須賀「だから！僕は兼好に僕の存在を見せつけて、僕のことを思い出して、後悔を残して死んでもらった！」

笑う須賀
沙織が勢いよく近づき、平手打ち

須賀　「え…」
丸井　「沙織さん？！」
沙織　「何も知らない癖に」
須賀　「は？」
沙織　「兼さんは…お父さんは…わかってたよ」
竜一　「お父さん？」
須賀　「なんだよそれ…」
沙織　「私は、兼好の二番目の不倫相手との間に生まれた。あなたの姉にあたるのかな」
須賀　「姉…？」

兼好がゆっくり起き上がる（概念としては霊）
環だけが兼好に気付く

沙織　「兼さんに聞いたの。息子がいたでしょうって。ポッドエッヂは息子が近くにいたら、譲ってたのかって。そしたら、素直に譲らないって言ってた」
須賀　「・・・」
沙織　「それからね、お父さん、こうも言ってたよ」
兼好　「…息子が近くにいたら。きっと、俺に似ていい男だろう」
沙織　「多分、あなたが息子だってこと、わかってたんだと思う」
須賀　「そんな…」
沙織　「兼さんがあなたのお母さんにしたことは最低だと思う。兼さんが悪い。でも兼さん、ずっとずっと、後悔してたんだよ」
須賀　「後悔なんか…そんなのしてるはずない！」
竜一　「してました。してましたよ、後悔」
兼好　「俺は俺を輝かせるあまり、俺の後ろにいたもの、すべてを陰に追いやって、真っ暗な中においてきてしまった」

はっとする須賀

須賀　「そんなはずない…それなら…なんで…なんで父親だって、言ってくれなかったんだ！」
終夜　「え～すがって、そんなこともわかんないの？」
須賀　「は？」
終夜　「言えなかったんだよ自分が悪いことをしたってわかってたから。謝ったって、今さら何かしたって、償えないのが、わかってたから、言えなかったんだと思うぜ」
竜一　「終夜さん…」
終夜　「いやさ～俺、実はまあまあ年いってて、実は子供もいたりしてさ～」

丸井　　「え…」
終夜　　「意外っしょ？驚きっしょ？…でも、だからさ、兼さんの気持ちもちょっとわかんだよね」
竜一　　「兼さんが、終夜さんのこと似てるっていってたの、そういうことだったんですね」
終夜　　「ま、はっきりこの話したことはないよ？でもさ、兼さん、初めて俺と会ったとき、言ったんだ」
兼好　　「お前、俺に似てるな。俺に似て、死ぬまで自分を許せないって目、してるな」
赤坂　　「死ぬまで許せない…」
終夜　　「そう！No1ホストに成り上がってバリバリのときだったから、自分なりに100パーばれない仮面つけてたつもりだったし、誰にもばれたことなかったのにさ、兼さん秒で見破ったんだよね。だから、恩返しの意味で、俺はここに入った」
赤坂　　「終夜…悪かった」
終夜　　「え、急に、何」
赤坂　　「俺、お前のこと、勘違いしてたみたいだ。お前は自分の私利私欲のためにしか動かない、この世に生まれるべきではなかった悪魔の子だと思ってた」
終夜　　「ちょっと言い過ぎな！でも…別にいーよ。赤坂聡赤坂聡！」
赤坂　　「フルネームやめろよ山形義雄」
終夜　　「本名やめろ！」
丸井　　「本名山形義雄？！」
竜一　　「そう、本名山形義雄」

わいわいしている声、一瞬で無くなる
兼好、須賀に近づき頭に手を置く
兼好と目は合わないがはっとして頭に触れる
あたりを見回す

須賀　　「父さん…？」
兼好　　「ごめんな、孝文」
須賀　　「…父さん…」

崩れる須賀
去ろうとする兼好
追いかける環

環　　「どうして？」
兼好　　「環。お前も、はやくお前を、許してやれ」
環　　「許す…？」

立ち去る兼好

環　　「嫌だ…嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！！」

直井、歩み寄るが環を見つめるだけ
環の叫び
暗転

■第十三幕

沙織、丸井、直井が仕事をしている
環が離れたところでポツンと座っている

沙織　「あーちょっと休憩しようー」
丸井　「私、お茶いれてきます！」
直井　「いやいや、僕がいきますよ！」
丸井　「えーそう？じゃあおねがい」
沙織　「おねがーい」
直井　「はい！」

走っていく直井

丸井　「そういえば、直井君に彼女ができた話、知ってます？」
沙織　「え？そうなの？」
丸井　「なんか、めちゃくちゃ可愛いです！って言ってました」
沙織　「へ～休みないのに、よく見つけたわね」
丸井　「それが、仕事中に出会ったとかで」
沙織　「え？それ業界人だったらまずくない？」
丸井　「私も心配で問い詰めました！でも、表に出てる子じゃないからって」
沙織　「ならいいけど…。あ、そうそう。兼さんこと調べてた資料、新たに届いてさ」

沙織、薄い封筒を取り出す

丸井　「まだ調べてたんですか？」
沙織　「いや、なんかおまけって感じで渡されたの」
丸井　「何が書いてあるんですか？」
沙織　「うーん、まだ見てないんだけど」

沙織と丸井、書類を広げる
だんだんと顔色が変わっていく
直井、お茶をもって戻ってくる

直井　「もってきました～」

沙織と丸井、勢いよく直井を振り返る

直井　「え…？」

少しの間

直井　「どうしました…？」
丸井　「…あなた…あなたは…誰？」

背景に文字が浮かぶ

背景の文字　　『――また、兼好が公表している妻「好美（よしみ）」との間に生まれた「環（たまき）」は、6年前に恋人を巻き込み飛び降り自殺を図る。』

環が動き出し、直井に向かっていく
背景の文字が一度消える

背景の文字　　『環はいまだ意識を取り戻していないものの一命を取り留めたが、巻き込まれた恋人は即死。その恋人は、当時兼好の付き人をしていた「直井篤（なおいあつし）」だった』

直井はっとする

直井　　「そんな…そんな…」

環、直井の腕をとる

環　　「ごめんね」
直井　　「・・・」
環　　「ごめん」

丸井と沙織がいたはずの場所には
人形が置かれぼんやりと照らされる
第一幕の位置に全員が現れる

直井　　「例えば生まれなかったとして、世の中は何か変わっていた？」
沙織　　「もしも生きていなかったとして、歴史に変化はあった？」
須賀　　「今生きているとして、変えられることは何があるか？」
兼好　　「過去に戻れるとして、何が変えられる。今、後悔しているとして、何が変わる」
環　　「今、生きていないとして、誰が私を見てくれる？」

立ち去ろうとする直井
（同時に全員がゆっくり去り出す）
駆け寄る環

環　　「どこへ行くの」
直井　　「どこにも行かないよ」
環　　「行かないで」
直井　　「どこにもいかないよ」
環　　「どうして…」
直井　　「きみのせいだよ」

直井、周りを見回してから、環を見る

直井　　「誰も悪くない。全部、きみのせいだよ」

直井、環にキス
環、その場に崩れ落ち、叫ぶ
心電図が止まる音

暗転

終